

第7回 タカの渡り全国集会 in 関東 2010

ー よみがえれサシバ サシバ営巣地保全の取り組み事例から学ぶ ー

サシバは環境省レッドデータブックの見直しで「絶滅危惧Ⅱ類」に位置づけられ、サシバを取り巻く環境は誠に厳しいものがある。今回の全国集会では、「関東地域を中心としたサシバの渡りの解明」、「サシバの繁殖地の保全」という二つの課題を取り上げた。第一部、第二部は前者の課題、第三部は後者の課題として、関東以北のサシバが営巣する里山の保全活動の事例を学ぶ。



1. 開催内容

日 時 2010年12月4日(土)
11時から17時30分(懇親会は20時まで)
会 場 立教大学 池袋キャンパス
主 催 立教大学、タカの渡り全国ネットワーク、
関東地域鷹の渡り情報連絡会、
八王子・日野カワセミ会
後 援 NPO 法人バードリサーチ、日本野鳥の会、
日本自然保護協会
内 容

- 第一部 サシバ調査観察団体の情報交流会
- 第二部 各地からの報告
- 第三部 よみがえれサシバ、サシバ営巣地保全の取り組み事例から学ぶ
 - (1) 基調講演 サシバの繁殖を支える里山生態系
 - (2) サシバ営巣地保全に取組みの各地からの報告
 - (3) 総合討論
- 第四部 懇親会

開催ポスター

参加者数 191名(北は青森県から南は沖縄県宮古島まで)
参加団体 20団体 資料のみ参加 8名(団体) 製品等展示 2社

2. 第一部 サシバ調査観察団体の情報交流会

11:00-12:45 10号館X204教室



各団体のブースは、渡りルート of 地図、調査地の概要、調査状況のリーフレット、写真などが用意された。たくさんの参加者が会場に集まり、各ブースでは地図の周りに集まりルートの情報交換や討議、調査の説明、名刺交換などが盛んにおこなわれ、調査地間や人との関係づくりに大いに役立った。

ブース参加団体 (20 団体)

- ・ 守谷鳥類調査会 (茨城県)
- ・ 日本野鳥の会茨城県稲敷グループ (茨城県)
- ・ とりで鳥の会 (茨城県)
- ・ 野田市三ヶ尾鷹渡り研究会 (千葉県)
- ・ 北総里山クラブ (NPO 法人谷田武西の原っぱと森の会) (千葉県)
- ・ 天覧山タカ渡り観察グループ (埼玉県)
- ・ 特定非営利活動法人バードリサーチ (東京都)
- ・ 八王子・日野カワセミ会 (東京都)
- ・ 三浦半島渡り鳥連絡会 (神奈川県)
- ・ 日本野鳥の会神奈川 & 三浦半島渡り鳥観察会 峯山有志 (神奈川県)
- ・ 鎌倉自主探鳥会グループ (神奈川県)
- ・ 神奈川県央、ふれあい自然探鳥会タカ渡り観察グループ (神奈川県)
- ・ 明星山でタカを観る会 (静岡県)
- ・ 鷹の渡り静岡 (静岡県)
- ・ 信州ワシタカ類渡り調査研究グループ (長野県)
- ・ 特定非営利法人ラポーザ (長野県)
- ・ 扇子山タカの渡り観察グループ (愛知県)
- ・ (財) 日本野鳥の会 豊田市自然観察の森指定管理者 (愛知県)
- ・ NPO 法人 希少生物研究会 (大分県)
- ・ オオタカ保護基金

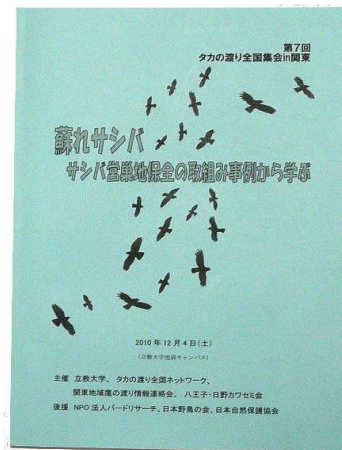
製品等展示 2 社 (ホビーズ・ワールド、興和株式会社)

3. 第二部 各地からの報告

13:00-14:30 14 号館 D201 教室

当日配布の全国集会資料冊子

第二部、第三部の発表内容と特別寄稿集



司会：粕谷和夫

(八王子・日野カワセミ会会長)



(1) 千葉県内陸部のタカの渡り

三ヶ尾鷹渡り研究会 紺野竹夫

- ー千葉県野田市で2003年から千葉県内陸部のタカの渡りを観察している
- ー秋の渡りでは400羽前後(年間)のサシバが三ヶ尾を通過
 - ・ 飛来飛去方向では、90%以上が東→西
 - ・ 渡りのピーク日は2、3日で、ピーク時間は8～10時
 - ・ 今までの群れの最大個体数は67羽
- ー2010年はサシバ308羽と減少した。減った要因を推測すると、個体数の減少、渡りの群れが分散、渡りルートが変わった、異常気象が影響したなどが考えられる。



異常気象に関して、アカトンボが少なかった、稲刈りでバッタが少なかった、ヒヨドリが少なかったことが気になった。

- ―三ヶ尾上空をなぜタカが通過するか、ゴミ焼却場の熱が上昇気流を作っているのではないか。
- ―調査上の問題点としては、調査員不足と渡り、非渡りの判断が難しいことがある。
- ―調査人員は少ないが、調査は継続してゆく。

(2) 東京の八王子・日野を通過する秋のサシバ (2010 タカの渡り観察結果概要)

八王子・日野カワセミ会 若狭誠

- ―秋の渡り調査を 1993 年から 18 年実施、
平均で 1,200 羽～1300 羽渡っているが、今年は 1540 羽で 1500 羽以上渡った。
- ―今年のピークは 9/26 と 10/2 の 2 回で、1993 年以降の実績にほぼ一致している。
- ―調査地は 3 カ所。東から城山湖、松竹公園西、陣馬山山頂で 9/11 から 1 カ月間調査した。
 - ・ 9/26 のピーク日に、松竹公園西では 49 羽と少なかった。途中から風向きが変わったことが影響したのか。
 - ・ 10/2 のピーク日には、城山湖は 463 羽 (10:50～の 30 分で 400 羽弱) と集中的に渡ったが、松竹公園西では、前後 3 日間に亘り 427 羽が渡った。
 - ・ 城山湖はいつもよりハチクマが少なかったが、10 月になりノスリの渡りが目に付いた。
- ―渡りのルート調査
 - ・ 奥多摩支部梅の公園からのサシバの一部は 9/26 陣馬山で捉えていると思うが、本隊は捉えていない。
 - ・ 奥多摩支部友田からのサシバは松竹公園を通過した。
(友田からの連絡を受け確認した)
 - ・ 10/2 奥多摩支部羽村と城山湖はともに多数渡った。
 - ・ 昨年解明した東の調布方向から城山湖へのルートは、東京都内を通過するサシバではないかかないか
とのご意見あり。(第一部情報交流会で)
 - ・ 八王子を通過したあとの場所 (例：藤野地区) の観察はしていない。
 - ・ 渡りルートが変移しているのか (ここ数年、東側の城山湖の渡り数が増えてきている)
- ―今後の課題
 - ・ 観察体制の整備：調査担当の高齢化対応 (他団体との合同観察、観察結果等の情報の共有化)
 - ・ サシバルートの探索
(梅の公園のサシバは八王子を通るのか、八王子通過したサシバはどこに行くのか)
一斉観察日の提案
 - ・ サシバが繁殖する里山の復元 (八王子里山クラブによる復元活動開始)



(3) 武山のタカの渡り (神奈川県横須賀市)

三浦半島渡り鳥連絡会 阿部 宏

- ―調査地の概要：武山の丘陵に北東風が直角に当たり、稜線沿いにより上昇気流が発生する。
2004 年から武山の展望台において観察し、これまでに 15 種類の猛禽を確認、今年はアカアシチョウゲンボウが確認された。
- ―調査期間：9 月中旬～10 月中旬連日観察 (サシバ、ハチクマ等の調査)
10 月中旬～12 月任意で観察 (ノスリ、ハイタカ等の調査)
- ―調査方法：年齢や性別なども極力記録するように努めている。
午前中に渡るので調査は午前中。
観察経験 5 年以上の者を 2 名以上配置。
(調査員は常時 5～6 名)
- ―調査結果：
 - ・ 2004～2010 に確認された猛禽は 10 種類、上位 5 種はサシバ(89%)、ハチクマ(6%)、チゴハヤブサ、ツミ、ノスリで、チゴハヤブサとツミは増加傾向



- ・平均通過数は、サシバ約 550 羽、ハチクマ約 40 羽（三浦半島全体の通過数は 1000 羽と推定）。
- ーサシバの渡りと気象条件の関係

2007 年から渡り 1 件ごとに気象条件を記録し、4 シーズン 2000 羽の渡りを解析してみた。
天候は晴、風向は北東、風力は 2~3、視界は良の条件を選好して渡っていると推測される。
- ー武山におけるサシバの渡り時期とコースとの関係

「武山コース」「北コース」「南コース」に大別して、2000 羽の渡りを解析してみた。
9 月は北コースが多く、10 月は南コースが多い。武山コースはあまり変わらない。
- ーハイタカ類の逆渡り

サシバやハチクマとは逆に、ハイタカ属では東進する個体がいる。
1996 年からの渡りのハイタカ属 115 個体の 70% は東進する個体である。
- ータカの渡りの観察地として有名になり、駐車スペース、展望台などが大変な賑わいとなることもある。
今後なんらかの対策が必要と思われる。

（４） 神奈川県央・ふれあい自然探鳥会 タカの渡り観察グループの活動

神奈川県央・ふれあい自然探鳥会 池上武比古

- ー2006 年から活動開始、最初は羽数が少なかったが、2010 年はサシバ 300 羽近くになり、ようやく目が慣れて勘所がわかってきた。
- ー菜の花台（600m）、権現山、湘南台の 3 地点。
- ー2008 年から菜の花台で春の観察をはじめた。2010 年の実績は 139 羽。
単独が多いがタカ柱も 3 度確認しており、サーマルを探していることがわかった。
春の渡りもルートがあるのではないかと、関東地区でも春の渡りを調査している人がいる、静岡ではかなりの数が出ている、などこの 3 月の調査が楽しみだ。
- ー特別寄稿 2 件の説明
 - ・サシバが探すサーマル
サーマルがどうできるのか、
できたらサシバはそこを通るのか、なかなか難しい。
海風と陸風や、人工物（高速道路など）との関係や
気象など、いろいろ勉強することがある。
 - ・関東のサシバは山梨・静岡ルート？
静岡の杉尾山、平山林道を 13000 羽のサシバが飛ぶ、
このルートについて推察した。



（５） 白樺峠の渡り調査 2010 年のトピックス

信州ワシタカ類渡り調査研究グループ 久野公啓

- ー1991 年から活動開始、20 年目のシーズンを迎えた。
20 年間で 1193 日調査し、羽数は 266,000 羽になった。
- ー白樺峠周辺の分布調査によると、白樺峠で認識できるのは 50% 程度
- ー1991~2010 年の調査から
 - ・サシバは平均 8000~8500 羽（全体の 6 割弱）、今年は 5995 羽
 - ・年推移では、サシバはでこぼこがあるがほぼ横ばいと見ている
 - ・時間帯では昼すぎころがピーク
 - ・幼鳥の比率→1/4、伊良湖岬では 1/2、海岸側に幼鳥が多い
 - ・サシバの渡り時期が早まっている（16 年間で 6 日以上）
- ー今年はノスリの当たり年で 4295 羽が渡った。ノスリは年々増加する傾向にある。
変わった幼鳥が多く渡った。どこから来てどこで越冬しているのかをこれから調べたい。
- ー課題



- ・資金の調達と調査員の確保（カラムツ切り、渡り調査のお手伝いを乞う）。
- ・サシバの渡りが早まっている。繁殖地や越冬地でなにが起こっているかを調べたい。

(6) 質疑

- ー 質問：池上武比古 回答：久野公啓
- ・信州新町のカウンタとの関係→100km 以上離れているとデータはなかなか合わない。
 - ・北アルプスを越えて渡るか→10～20 羽サシバが越えるのを目撃した情報は多数あり。
 - ・どこから来ているか→長野の北、新潟、山形で繁殖した個体が白樺峠を越えると思われる。
- ー 質問：阿部 宏 回答：久野公啓
- ・9月のピークと10月のピークでの成鳥の割合は？→
白樺峠ではシーズン初めは成鳥が中心で、シーズン終わりは幼鳥が多くなる、逆に海近くではシーズン初めのお盆ごろに幼鳥が多い。

4. タカの渡り全国ネットワーク事務局からの連絡

事務局：熊崎詔之

- (1) タカの渡り調査は、飽きてしまう人が多い。シギチの時期とバッティングするし調査を継続することが難しい。自分でテーマを見つけて、調査を楽しいものにすることが重要だと思う。
- (2) タカの渡り全国ネットワークの会計担当を変更した。
- (3) 風力発電事業の影響について調査協力している。環境省から「鳥類等に関する風力発電施設立地適正化のための手引き」がほぼ出来上がっている。インターネットで見られるので見てほしい。ハザードマップをつくる要望をだしていたが難しいようだ。
地元の岐阜に風力発電計画がある。ウィンドパーク南伊吹（16 基）で白樺峠からのハチクマが通ると真ん中にあたる。逐次情報を出したい。



5. 第三部 蘇れサシバ、サシバ営巣地保全の取組事例から学ぶ 14:45～17:30 14 号館 D201 教室

座長：新保國弘
(千葉県東葛自然と文化研究所所長)



5. 1 基調講演 サシバの繁殖を支える里山生態系

東京大学大学院農学生命科学研究科教授 樋口広芳

(1) タカの渡りに関する最新情報

いただいた演題は、里山環境でのサシバの繁殖環境の保全ですが、渡り抜きにはできないと痛感した。渡りについてサシバの渡りの前に、ハチクマの渡りを抜かすわけにゆかない。新しい情報もあるのでお話しする。



ーハチクマの渡り（愛称‘アズミ’の渡り経路）

秋に安曇野を出発し東シナ海 700 Km を越え→中国内陸部→海南島→ベトナム→ラオス、タイ→シンガポール→インドネシアに到達しここで越冬、片道 1 万キロ以上の大きな迂回経路をたどる。他の個体もだいたい同じような経路をたどる。

春は、インドネシアから同じ経路をたどり→ミャンマーに 40 日滞在→中国雲南省を経て北上→朝鮮半島を南下→日本→安曇野に戻る。春と秋で大きく違う。

ハチクマは、春秋を通じて東アジアの全ての国を通るすばらしい鳥です。

なぜ、違う経路をたどるかは、東シナ海の海域の気象に鍵がある。

秋は、東シナ海の気象条件が安定しているので渡れるが、

春は、東シナ海の気象条件が不安定で危険で大陸に渡るほうがずっと安全だからと思われる。

気象条件、気圧配置、風向きが重要なことがわかってきている。

ーサシバの渡り

栃木、福島、新潟、千葉のサシバ調査では、一言で言えば国内旅行みたいなもの。

春はすいすいと渡る。先島諸島を北上する鳥はいろんなところへ散らばっていく。経路は淡路島あたりで新潟方面と関東方面にゆくのとわかれる。秋も同じルートを折り目正しくわたる。

いくらやっても国外へ行かない。南西諸島でとまってしまい疑問に思っていた。

ところが、昨年九州のサシバをはじめたが、これが見事に国外だった。

サシバの渡りはハチクマの渡りに比べて面白くないかなと思っていたがそんなことは全然ない。

十分解き明かされていないのですが、驚くべき秘密がいくつも隠されている。

同じ個体が、毎回全く同じ渡りが正確に出来るのは、経路もスケジュールも同じでカレンダーもほぼ同じで正確に渡れる能力は非常に驚きである。

今までの鳥の渡りのイメージとはずいぶん違うことを鳥たちはしている。

驚いたことに一方でこういう鳥もいる。年によって経路が違う。

2008 年春に石垣島から岩手に渡ったサシバが、秋には台湾に渡っている。さらに 2009 年春には台湾から大陸経由でハチクマのような経路で渡ってくる。

なぜ違う経路を知っているのか、驚きである。東アジアの地形を熟知している。

経路を変えるのはハチクマと同様、東シナ海における春の気象条件の不安定さが影響しているようです。（調査中）

東シナ海 700 Km² 日くらいかけてゆっくり渡っている。サーマルを利用しているからか。サーマル地図が手に入ると、タカの渡りの重要な情報になる。今は GPS による位置情報しかわからないが、高度の情報がわかると、どのようにサーマルを捉えて移動しているかがわかる。今後の課題です。

(2) サシバの繁殖を支える里山生態系

里山は、広葉樹林、人工林、水田、小川、池沼などがモザイク状に存在する環境で、モザイク状であることが非常に重要です。モザイク状につながっていることで、カエルやヘビがいて複雑な食物連鎖の中でサシバやオオタカにつながる環境になる。人は、さまざまな営みの中で独特の生環境を維持してきたが、最近高齢化や機械化などにより生環境の管理、生息状況の悪化が心配です。

モザイク状であることは、サシバという種が生きる上でも必要です。営巣場所としての高木があることや、休息、交尾、などそれぞれにあった環境が必要です。

また、里山の生態系は、近隣や遠く離れた東南アジアなどの生態系とも繋がっているため、里山だけ考えていたのでは不十分です。

サシバを観察していると、繁殖するとどこかへいってしまう。追跡してみると林のほうに行っている。換羽の時期を林の中ですごしているようだ。

越冬地（石垣島）の越冬場所では、高木は少ないが営巣しないので問題ない。

越冬地では草丈が非常に重要な要素で、30 cm以上になるとバッタなどがとれにくくなる。
タバコ、サトウキビ、草などなにをいつどう植えて、いつどのように刈るかがサシバの採食条件、越冬条件に影響する。
ということは、繁殖地でも越冬地でも農業活動そのものがサシバの生息条件を左右する。

いつどこで何を獲っているのか

サシバは待ち伏せ型の採食

- ・ 春は水田でカエルなど、夏に近づくと斜面林の樹上から昆虫の幼虫などをとる
- ・ 電柱を多用する
- ・ モグラ、カエル、昆虫、幼虫やネズミなど巣に持ち込んでいる。

サシバの生活環境は年々悪化している。渡ってきたサシバが絞られる宮古島で減少傾向である。
里山環境が変化すればエサのカエルなどは、どうなるか。

カエルは水田から林に移動するものなので、水田と林がつながったモザイク状の環境が必要。

- ・ 水田が道等で分断されるとカエルは減る。森林伐採、水田放棄でいなくなる。
- ・ 圃場整備が進んだ水田より、昔ながらの水田のほうがカエル、ヘビが多く生息する。
- ・ サシバのエサ、特にカエル類を維持するには、水田と林の連結性を維持することが重要。

5. 2 サシバ営巣地保全に取り組みの各地からの報告

(1) 茨城の事例：サシバの住める里山づくり（大子町）

こどもエコクラブ（八溝自然たんけんたい） 小学生4名、宮田国敬

ー八溝自然たんけんたいの紹介

2002年設立、昨年からはサシバの住める里山づくりをテーマに生き物調査、かべ新聞や里山便り発行などの活動をしている。今年、コカコーラ環境教育優秀賞を受賞した。

ーサシバの住める里山について

八溝川上流でサシバが繁殖している里山を調査して2年目になる、地域の協力もあり一緒に活動している。

豊かな自然が残っている。たくさんの生き物が生活する里山にしていきたい。

ー活動実績

八溝川の生き物調査、久慈川の水質調査、春のたんぼの生き物調査をやった。

たくさんの魚、水生昆虫、鳥、カエルの卵、植物などがいた。水がきれいなことがわかった。

ー里山を守っていくために

生き物調査で自然環境の変化の調査を進めてゆきたい。

農家の人たちに、農薬や化学肥料をなるべく使わないように、冬でも田んぼに水をはっておくようお願いしてゆきたい。

今ある素晴らしい環境を残していきたい。



(2) 埼玉の事例：谷津再生への取り組み

天覧山タカ渡り観察グループ 市川和男

ー天覧山の周辺は1970年代後半から丘陵地が開発され、自然が破壊されはじめた

宅地、ゴルフ場などの開発によりサシバの繁殖数は1980年代から激減

バブル崩壊により開発されず、放棄されているところもある

ー天覧山周辺は緑地の多くが宅地が開発される予定であったが、市民の反対運動やバブルの崩壊で計画は2005年に中止。市はここを景観緑地に指定し、土地の所有者の開発会社も里山として保全する方向になった。

天覧入りの再生活動を継続中

稲づくり（昨年はイノシシ、今年は収穫）

トラストコンサート（休耕田を買い取ろう）

エコツアー

- (駿河台大学先生のガイド、作業手伝い)
- ニホンミツバチの飼育
- 里山観察会
- トウキョウサンショウウオのための水たまりづくり
- 周囲の樹林地の手入れ
- など
- ー生息する生物 ヤマトガエル、トウキョウダルマガエル、ムカシヤンマ、カヤネズミ
トウキョウサンショウウオ、ゲンジボタルなど、
ニホンカモシカも出てくる
- ーNPO法人による農地の買取り。(全国的にも珍しい)
- ー人材育成 飯能市オープンカレッジ エコツアー等のガイド育成プログラム。
- ーサシバが繁殖を終えたあとに移動するのはこの場所でも観察されている。



(3) 千葉の事例：野田市江川地区におけるサシバの営巣・生息環境保全の取組みについて

株式会社野田自然共生ファーム 木全敏夫

つくばエクスプレス新駅から3Kmの江川地区は土地区画整理事業中止後、野田市が「自然保護対策基本計画」により、90ヘクタールを、ビオトープとして整備することになり、本農業生産法人を設立した。

- ー土地を取得し、自然と共生する農業を行う会社
- ー野田市が99.9%出資
- ー江川地区90ヘクタールを以下のゾーンを定めて管理
 - ・保全管理エリア 22ヘクタール
(オオタカやサシバ等の餌場や生育環境保護)
 - ・市民農園エリア 7.8ヘクタール(1000人規模)
 - ・管理施設エリア 1.5ヘクタール
 - ・ブランド米エリア 33.2ヘクタール(米づくり)
 - ・保全樹林地エリア 25ヘクタール
(田んぼと水路と樹林がまざったエリア)
- ー耕作放棄地への田んぼの復元により数年でものすごい数のカエル、昆虫が復活。
 - ・ニホンアカガエルの卵塊が10,000個も
 - ・間伐した竹をさして周りの草を刈りサシバがカエルを取りやすくしている
- ー今年のCOP10関連で最高賞の農林水産大臣賞を受賞



(4) 岩手の事例：サシバの狩場環境の創出にむけた草刈りや杭の設置の保全的効果の検証

岩手大学 河村詞朗

- ーサシバの生態と生息数の激減の原因
耕作放棄地(昭和50年の3倍に増えた)は、農業就業人口の減少と高齢化で増加しており更に里山環境は劣化する。早急な保全対策が必要です。
- ーサシバ生息環境の保全対策は、特に狩場環境の確保が特に重要と考える。
- ーサシバ生息環境の保全対策のため、人為的にサシバの狩場環境を創出
 - ・草丈が20cm以下のところで採食している(80%)。
 - ・電柱の利用が頻繁である
 ことがわかった。このため、
 - ・4mの杭を複数設置し、サシバが止まる場所を作った。(非耕作水田2カ所で20本)
 - ・草刈を随時実施し、草丈が20cmを越えないように管理した。
- ー効果
検証方法：育雛期の定点観測法による利用実態の把握
杭は結構よく使ってくれた。採食に利用したパーチ物の割合で、2008、2009では電柱の



割合が高いが、杭を設置した2010年では杭の利用割合が40%、その分電柱の利用頻度が減っている。

また実験地周辺（2カ所のうち1カ所）での採食行動増加した

一考察

一定の効果が確認された。まったく利用されない箇所があったが、1カ所は1回も採食行動が確認されなかったが、ノスリとの競合が考えられる。

5. 3 総合討論

座長：新保國弘（千葉県東葛自然と文化研究所所長）

パネラー：樋口広芳（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

宮田国敬（こどもエコクラブ（八溝自然たんけんたい））

木全敏夫（株式会社野田自然共生ファーム）

東 淳樹（岩手大学農学部）

質疑と討論

- ・岩手の事例で、杭周辺の草刈の期間と利用頻度の変化は？
→草刈は5月上旬から9月上旬、利用頻度は巢立ったあとに低下、7月下旬は見られない
- ・谷津田以外に丘陵地の溪谷にサシバがいると聞くが、なにか情報があれば教えて欲しい
→クマタカが生息するような山地でもサシバが生息しているが、正式な情報はない。話は聞いているので、今後協力して調べていきたい
→伊豆諸島では谷筋にサシバが入っているのは一般的である。
- ・伊良湖の渡り数が少なかったのはどうしてか？
→波があるが、伊良湖岬はだんだん数が減っているという印象がある
- ・チュウヒの渡りパターンは？
→チュウヒとハイイロチュウヒを衛星追跡している。個体数が少なくなるともいえないが、本州中部以西で越冬しているものは、北海道、サハリン、ロシアあたりが繁殖地
- ・サシバの渡りを見るときにパンなんか食べてちゃダメ、田んぼのことを考えてご飯を食べよう
- ・岩手の事例では、杭の高さを最適にする必要がある、太さも考慮の必要あり
- ・農産物の関税がなくなると、さらに田んぼがなくなるのでは？
→日本の農業政策がますます日本の農業をだめにしている、政府にがんばってほしい
→付加価値をつけた米を作り、自ら販売先を開拓している農家もある。サシバの繁殖する安全な里山の米をサシバ米として売り込んだらよい。
- ・野田市ではコウノトリを復活させることに取り組みはじめた
- ・日本の農業がどうなるのかが里山、谷津の未来を左右し、これがサシバにもかかわってくる。サシバが住む里山、谷津というのが考える鍵になる。
サシバは里山のモザイク環境をたくみに利用する鳥である。
サシバを里山の象徴種、食物連鎖の上位種として認識する優れた点はサシバは有害鳥になりにくいということ。
コウノトリ、トキが増えることは好ましいことではない。
トキやコウノトリは外来種であるとともに有害鳥として昔農業者と軋轢を起こしてきた。
保全が騒がれる時期はよいが、もし今後増えていくと確実に農業との軋轢を起こすが、サシバは問題ない。また、土地本来の遺伝種を残すのが、基本中の基本と考える。
繁殖地だけでなく、越冬地の環境もある。さらに、中国、東南アジアの自然環境は大きく変わってきている。
タカ類を通じた自然環境保全、里山環境の保全は一つの国だけでなく、いろいろな国の人たちと協力して進めてゆくことが必要になる。



- ・サシバが大事ということをどう相手に伝えるか
→サシバが里山で果たしている役割を把握すること、これを浸透することが大事
- ・タカの渡りを観察することと、営巣地を保全することをどのようにリンクさせるか？
→そのようなテーマ（渡りと、田んぼと、暮らし）のテレビ番組ができるといい
→実はダーウィンが来たでのサシバの番組でも取材が来たが、渡りについては番組には出てこなかった。
→タカの渡り全国集会で両者を結びつける機会を作ることの継続
→タカが減れば渡りも減ってしまい、渡りを見る楽しみも少なくなる。
また、里山の保全をやっている人が、渡りに関心をもってもよい。
自分の里山の環境保全がほかの周辺地域、遠くの地域とのつながっているが、それをつなぐのがサシバ、ハチクマなので、どちら側からも関心をもとう。
- ・今大会で前半にタカの鷹の渡りをやって、後半で繁殖をやったことは、すごいことだ。

6. 第四部 懇親会 18:00-20:00 ウィリアムズホール2F「カフェテリア山小屋」
懇親会参加人員 59名



当日配布の全国集会資料冊子に印刷された特別寄稿（誌上参加）

1. 宮古諸島の住民とサシバ（久貝勝盛、仲地邦博）
2. 関東地域のサシバの通過ポイントと観察ネットワーク（粕谷和夫、神山和夫）
3. 茨城県内の特異なサシバ渡りを追った25年に軌跡（池野進他）
4. 東京の平坦部を通過するサシバ（吉邨隆資）
5. サシバが探すサマー（池上武比古）
6. 関東のサシバは山梨・静岡ルート？（池上武比古）
7. 我が家で観察する「安曇野のタカの渡り」（大関豊）
8. 生きた谷戸の復活を目指した「ささやか」な取組み（粕谷和夫）

<付録>

第7回タカの渡り全国集会 in 関東を主催して

(第7回タカの渡り全国集会 in 関東実行委員長 粕谷和夫)

1. 全国集会の開催までの経緯

2009年12月に立教大学で開催した2009関東地域鷹の渡り情報交換会に参加された「タカの渡り全国ネットワーク」事務局長の熊崎詔之さんと「信州ワシタカ類渡り調査研究グループ」の久野公啓さんから、東京での全国集会開催の要請を受けました。この時に出席されていた立教大学の上田恵介先生から同大学の教室を会場として利用させて頂くことに内諾を頂きました。以前から関東地域鷹の渡り情報交換会の事務局を担当している八王子・日野カワセミ会としては、カワセミ会発足25周年記念事業の一つとして位置づけることとして全国集会の開催を引き受けました。このような経緯を踏まえ、立教大学、タカの渡り全国ネットワーク、関東地域鷹の渡り情報連絡会との共催というかたちをとりました。

2. 第7回全国集会の柱

従来の全国集会はサシバの「渡りの羽数、時期、ルート、風力発電問題等」が中心課題でしたが、今回はそれだけでなく、「営巣環境の保全」を柱に据えました。その理由はサシバが環境省レッドデータブックの見直し(2006年度)で、「絶滅危惧Ⅱ類」に位置づけられサシバを取り巻く環境が厳しくなっていること、関東地域がサシバの主要な繁殖地であることによります。

そこで、第3部を「よみがえれ・サシバ、サシバ営巣地保全の取組事例から学ぶ」と位置づけ、関東地域で実際に保全活動に取り組まれている茨城、埼玉、千葉の事例を取り上げました。さらに岩手大学の東淳樹先生から花巻市で行った休耕田の管理とサシバの営巣環境保全の関係の研究成果を報告したいという申し出がありましたので、これも事例として加えました。東京大学大学院の樋口広芳先生には、サシバの繁殖を支える里山の役割について基調講演をお願いしたところ、快諾して頂きました。また、第3部の座長には「オオタカの森」、「水の道・サシバの道」等の著者で長年、千葉県を中心に里山の保全活動に取り組んでいる東葛自然と文化研究所所長の新保國弘さんをお願いしました。

3. 後援と広報

全国規模で広報することを狙いにNPO法人バードリサーチ、日本野鳥の会、全国自然保護協会に後援を依頼し、実際の広報は以下の方法で実施しました。ポスターは会員の阿江範彦さんに作成を依頼しました。

- (1) ポスターA3版の作成
- (2) 八王子・日野カワセミ会HPにポスター掲載(合わせて参加申込受付の告知)
- (3) 関連HPとのリンク(八王子・日野カワセミ会のHPにリンク依頼)
- (4) 全国のネイチャセンター等にポスターをプリントアップしての掲載を要請
- (5) 関連誌に記事として掲載依頼(日本野鳥の会会報、全国自然保護協会会報、日本野鳥の会東京支部会報、自然通信)
- (6) メーリングリストの活用(6以上のメーリングリストで呼びかけ)

4. 資金

どこからも資金の補助を得ず、資料代(一部千円)の売上を唯一の財源としました。参加者が150名を超えなければ赤字になるという収支予算でしたが、実際は予想を上回る参加があったため、少々の黒字となりました。立教大学の教室を無料で借りることができたことも、経費を安くできたことの理由の一つです。黒字分は関東地域鷹の渡り情報連絡会の今後の運営経費とカワセミ会事務局経費の補てんに充当しました。

5. 反響(成果)

参加者数は事前申込者152名、当日参加者39名で合計191名でした。また、第1部の情報交流会の出席団体は20団体でした。当初予想を上回る参加者があり、しかも参加者の熱気と熱気がぶつかり合いました。参加された方がそれぞれ何らかの得るところがあり、今後のサシバの観察や保全に一層のやる気を起こすきっかけを作る集会になったのではないかと思います。

第3部で「サシバの住める里山づくり」を報告された茨城の「こどもエコクラブ(八溝自然たんけんたい)」は小学校6年生4名によるもので、活動の成果として、①サシバの里山に住む住人に子ども達の活動がわかってきた。②地域の人々の環境に対する意識の変化が見られるようになってきた。③地域・学校・こどもエコクラブ会員が協力してサシバを守る活動ができるようになってきた。と、サポーターの報告書に記載がありました。これは、ねらいとした「サシバ営巣地保全の取組事例から学ぶ」の典型的な事例ではないでしょうか。

今回の全国集会の最大の成果は、主にサシバの渡りの観察に取り組んでいるグループ、主にサシバの営巣

環境の保全に取り組んでグループが一同に会し、同じ目線で相互交流ができたことではないかと思います。多くの参加者の皆様から感想を頂きましたので、その一部を以下に抜粋で掲げます。

- * 第1部で、グループの熱心な情報交換、笑顔いっぱい、質問にも熱心にやさしく答えてもらって、いい雰囲気を感じました。各地からの報告は、勉強になりました。
- * 構成の素晴らしさは勿論のこと、基調講演、4つの報告とも聞けてよかったというものばかりで、終日感動でした。総合討論では樋口先生、久野さんはじめとする皆様から、この会場でなければ聞けない貴重なご意見をたくさんいただけて本当に助かりました。タカの渡りと営巣・繁殖地の保全活動は、中継地、越冬地の生息環境と並べ、同次元の中で、捉えていけないといけないこと、すごく実感できました。これこそが今回の全国集会の大きな収穫と思いました。
- * 随所に気配りやアイディアにあふれていて、とても良い会だったと思います。第3部のシンポジウムの内容、人選もよく、今まであったことのなかった人たちとも交流できて楽しませていただきました。
- * さまざまな興味深いお話を聞くことができ、大変充実した時間を過ごすことができました。大変良い集会だったと思います。関東の熱気も感じることができました。そして、この熱気が全国から集まった人たちに伝わり、タカの渡りに関わる人たち、サシバに関わる人たちみんなのこれからの活動のエネルギーになると思います。ますます、調査や保護活動が盛んになることを願いたいと思います。
- * 総合討論でもありましたが、保全を考える上でも繁殖地で見ている人と渡りを見ている人の交流は重要になってくると感じました。
- * 第三部では、樋口先生の貴重な講演、特にハチクマ・サシバの渡りルートの解明では、今までのずうっと思っていた疑問が解け、まさに目から鱗が落ちるようでした。青森から沖縄まで遠来の方々が集まってこられる理由がわかったような気がしました。

●以下は、第3部で座長をつとめた新保國弘様から寄せられた感想文です。

「サシバの魅力と大切さはオオタカを越える」を実感

第三部座長 新保國弘

2010年12月4日(土)、立教大学で行われた第7回タカの渡り全国集会に参加した収穫の一つは、「サシバの魅力と大切さはオオタカを越える」を実感できたことです。何故オオタカと比べたかと言いますと、オオタカは狩りの名手として徳川家康や吉宗など将軍の鷹狩りに使われてきた歴史と、行政レベルの保全の小史があるからです。

オオタカ保全小史を概括するに、平成3年に環境庁の「レッドデータブック」で危急種に分類され、平成5年月施行の「種の保存法」で国希少野生動植物の希少種に指定され、平成8年の環境庁の『猛禽類保護の進め方』でイヌワシ、クマタカとともに具体的な調査・保全の指示が示され、新聞社説で幾度となく「オオタカの舞う街づくり」と称えられように循環自給型の空間・里山自然のシンボルとして注目され、平成10年に絶滅危惧Ⅱ類に改められ、同年千葉県流山市で宅鉄法（つくばエクスプレス）による土地区画整理事業から外したオオタカの営巣する森の約半分24haを都市公園法により都市公園（都市林）として残す基本構想が県から発表、平成18年に準絶滅危惧に変更、などを経て今日に至っています。

しかし、二次林（雑木林）に営巣し主に鳥類をエサとするオオタカでは谷津環境の保全までカバーすることは難しく、オオタカ保全の先行地流山市においてさえ、都市化の進行と共に谷津田はなし崩し的に埋め立が進み、サシバ（平成18年に絶滅危惧Ⅱ類に分類、それ以前はランク外であった）の営巣は平成3年を最後に過去の記録となってしまいました。

そうした歴史を振り返ると、今後、サシバの営巣が可能な谷津田空間の保全の重要性を年々財政事情が厳しくなる自治体などの理解と協調を得るには、谷津田のモザイク環境で営巣し、両生類のカエルや爬虫類のヘビや昆虫のヤマムコなどをエサにし、関東以北を生まれ故郷（本籍地）とするサシバが繁殖できることの生物学的、社会経済学的な意義、役割を論理的に説明可能な環境づくりが課題なのです。

とはいえ、自治体の首長によっては、サシバの営巣できる谷津環境の重要性を独自に判断して積極的事業展開を図っている自治体もないわけではありません。その一例が第3部の報告にあった野田市江川地区です。オオタカとサシバが経年的に繁殖し、かつ千葉県の主要な秋のタカの渡りルートでもある野田市江川地区では、営巣環境の保全と改良を野田市が3億円を超える予算措置をとり農業生産法人を設立してゼネコンに仮登記されていた約32haの農地を取得し、市民の協力を得ながら斜面林を含め90haの大規模谷津空間の保全と伝統的農法による水田型市民農園などの活用実績、つまり農業生産法人として健全な経営が行われています。

さて、本集会の次第は、第Ⅰ部の情報交流会（ポスターセッション風）20団体90分、第Ⅱ部の各地からのタカの渡り調査報告5地区各15分、第3部の樋口広芳東大教授の基調講演「サシバの渡りと里山環境の利用」60分、各地からのサシバ営巣保全事例報告4地区各15分、総合討論30分でした。その結果、タカの渡りとサシバの営巣地保全は一体のものであり、営巣地あつてのタカの渡り調査・観察であり、さらに渡りルート、中継地、越冬地までも視野に置いてサシバの全体像を見ていくことが大切であることを学びました。そのような観点から、本集会は今後のタカの渡り調査・観察とサシバ営巣地保全の展開と協調に大きな刺激と方向性を示唆したと言えます。